

— ALWAYS THINK SNOW

And Snow

Xraeb Book
vol.04
June 2025

発行 株式会社 クラブ
〒949-6102 新潟県南魚沼郡湯沢町神立39-8
025-785-7288
www.xraeb.co.jp

制作 株式会社 キャスト

デザイン 芳川 大樹

©2025 Xraeb Printed in Japan
※本誌掲載の写真、イラスト、記事の無断転載を禁止します。

And Snow

Xraeb Book vol.04 2025

アスリート特集
チームクラブを応援しよう！



PROFILE

クラブスーパーアドバイザー
SL種目で長野五輪から4大会連続して日本代表として出場。トリノ五輪4位。引退後は全日本スキー連盟の要職を歴任。経営者としての顔を持ち、21年には一般財団法人冬季産業再生機構を設立し、代表理事・会長としてスキー場のコンサルティングを手掛けている。

@kentaro_minagawa_official

トリノ五輪では100分の3秒差の4位になり、日本人として50年ぶりの入賞を果たした。

皆川賢太郎

写真／アフロ

チームクラブの礎を築いた

吉岡大輔

オリンピックと技術選。両分野で高い技術と適応力をもちつつ、長期間にわたってトップレベルを維持する。

PROFILE

クラブスーパーアドバイザー
GS種目でトリノ五輪に出場し、24位という成績を残した後技術選に転向。10年ほど競技に打ち込み、全日本スキー技術選手権大会で3度の優勝を飾る。現在は経営者として、ニッパースノーパークでスクール・レンタル・キャンプ場を運営。

@daizans54

写真／アフロスポーツ

INTRODUCTION

この冬は「チームクラブ」を応援しよう！

冬の大舞台が来年に控えるなか、「チームクラブ」所属アスリートたちは目標に向け、日々トレーニングに励んでいます。たった一度の人生をスキーに投じ、一点の曇りもなく、世界の頂点を目指す。種目は異なれど、それは全員に共通した思いです。今号ではそうした選手たちにスポットライトを当てました。「チームクラブ」の選手たちを通じて、まだまだ知らないスキーの奥深い世界に触れながら、トップを目指す選手たちの決意を感じてみましょう。

What Is Team Xraeb?

チームクラブとは？

新潟県湯沢町を拠点に、40年以上にわたり、モノや場所、サービスを通じてスノーリゾート振興に取り組んできた「クラブ」。そのクラブのスキー・スノーボード専門店「クラブスポーツ」が、アスリート支援を通じて、ウィンタースポーツ業界を活性化していきたいと立ち上げたのが「チームクラブ」です。チームの原点は、現在クラブのスーパーアドバイザーを務める、皆川賢太郎さんと吉岡大輔さんという2人のトップアスリート。クラブは彼らとともに成長を重ね、いまでは次世代のアスリートを応援するだけでなく、すべての人が雪山を楽しめる未来を目指して、日々活動が続けています。

▶ どんなアスリートが所属している？

チームに所属しているのは、小さい頃からクラブが見守ってきた選手たち。そこから、こんな人がいるよ、こんな場所があるよと紹介でひろがっていったチームの輪。競技者としてはもちろん、人間性にも優れた選手、熱い想いを持った本気の選手が集まっています。スーパーアドバイザー2名、テクニカルアドバイザー2名、トレーナー、そして各種目のアスリートと、皆で切磋琢磨できる環境です。種目もアルペンからフリースタイル、新種目のスキモと様々。

▶ チームクラブの強み

あらゆる業務を手掛け、様々な人や物が集まるショップを母体とするチームならではの強みとして、メーカーと選手をつなぐマッチングや、グッズや情報の提供など、選手ごとにカスタマイズされたサポートを提供しています。ショップ2階のトレーニング施設も開放しています。

▶ 大切にしていること

競技生活だけでなく、その先の人生も豊かになるような関わり方を心がけています。具体的には、引退後のセカンドキャリア支援のため、年に2回の交流イベントを通して、プロとしての自覚、コミュニケーションスキルなどが身につくようサポートしています。

▶ この冬も一緒に楽しみましょう

近年話題の「推し活」も、突き詰めれば誰かを応援すること。それは私たちを楽しませてくれます。誰かを気にかけること、声援を送ること、一緒に泣いたり笑ったり、ドキドキワクワクを共有する。そのすべてが、もう立派な「応援」なのかもしれません。雪山で遊ぶこと、それもまた、選手たちへのエールのひとつ。この冬はぜひ、「チームクラブ」をあなたの“推し”に加えてみませんか？

CONTENTS

And Snow vol.4 2025

- | | | | |
|----|-------------------------------|----|--------------------------------|
| 04 | ATHLETE FILE 01:スキークロス／須貝龍 | 14 | ATHLETE FILE 03:モーグル／田口友麻 |
| 08 | スキーの体をつくるトレーニング3 | 16 | ATHLETE FILE 04:スキモ／田中友里恵 |
| 09 | AND SNOW COLUMN_1 エイトフィットスタジオ | 18 | ATHLETE FILE 05:カーリング／SC軽井沢クラブ |
| 10 | ATHLETE FILE 02:アルペン／若月隼太 | 20 | 競技の基礎知識をおさらい |
| 12 | 世界トップレーサーのチューンナップを覗いてみた | 22 | House of the Deers |
| 13 | AND SNOW COLUMN_2 Jupiter-X | | |

自分を信じて

no.01
ATHLETE
FILE
SKICROSS

須貝 龍

「ここで一番にならないといけないんだ」。
7年のときを経て限りなく近くにつけた、いま。
須貝 龍は、在りたい自分であり続けるために、
未知の世界に挑む。

PROFILE

1991年生まれ、新潟県胎内市出身。クラブ所属。
海外を拠点にFISアルペンレースを転戦後、2018
年にスキークロスへ転向。W-CUPで何度も表彰
台に上がり、2025年世界選手権銅メダル獲得。
世界の頂点を争うトップアスリート

須貝龍の現在地

須貝龍という名と、スキークロスというスポーツが瞬く間に日本中を駆け巡ったのは、4年前の冬のこと。
「悔しかったです。やっぱり。1回戦で負けるなんてまったく考えてなかったから。でも、あの北京があったから、いまがあります。あとは一番になるだけなので」
強い腫で語った。2025年の世界選手権で日本スキークロス史上初の銅メダルに輝き、FIS W-CUP第12戦では2位まで詰めた。須貝龍はいま、スキークロス界の頂点に最も近い男だ。

20歳でクラブの所属に

出身は新潟県胎内市、スキー好きな両親のもと、2歳で滑り始めた。
「てっぺんから一直線でボトムまで滑り降りて、バトリールに捕獲される子でした(笑)。将来はアスリートにな



Photo : AFLO

1. 学生時代は回転種目もこなした
2. 2018年最もアルペンでキャリアハイの頃

りたいって、中学生くらいから意識してましたね」

子ども時代から体が大きくて強かった。速さも規格外。高校卒業後アルペン選手としての活動を本格化し、国内では断トツの強さで2014年に全日本チーム入りを果たす。その過程でクラブの所属となった。
「19・20歳の頃、夏の間はクラブでアルバイトしていたんです。楽しかったですよ」
須貝龍とクラブの絆の始まりはここからだ。

世界の壁と取引

須貝龍は、2018年まで海外に拠点を置いてFIS W-CUPの高速系種目で戦っていた唯一の日本人だった。

2018年、W-CUPポイントも初めて獲得したが、平昌五輪の出場は叶わなかった。そんなとき、全日本コーチの皆川賢太郎から「スキークロスをやってみないか」という声がかかった。
「じゃあ4年間だけやります！って言ったんです。平昌

を逃した、でもオリンピックには出たい。だからスキークロスに転向して4年でメダルをとって、好きなアルペンに戻ってこようって。それが当初の計画だったんですけどね(笑)」

そこまでアルペンにこだわる理由は何だったのか。
「スピードです。僕、スピードが大好きなので。それと環境的に世界とは大きな差があって、限界を感じていました。スキークロスなら万全のチー

情熱は努力を超える

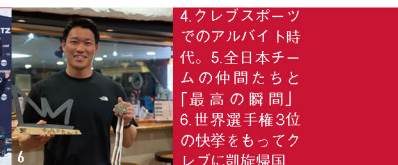
ム体制でやれる、という条件にも惹かれました」

限られた時間と資源をいかにうまく使って夢に近づくか。須貝龍にとって金メダルへの最速のライン取り、それはスキークロスという取引だったのだ。

Photo : AFLO



3. ポジション争いと駆け引きを巡る4人の熾烈なヒートは、戦略が交錯する白いF1とも。先頭が須貝龍



4. クレブスポーツでのアルバイト時代の。5. 全日本チームの仲間たちと「最高の瞬間」
6. 世界選手権3位の快挙をもってクラブに凱旋帰国

「でもスキークロスなんてこれまで一度も見たこともなかったんです（笑）。だから初めてのことだらけ。スタートの仕方すら知らなくて、いきなり試合で、全部ぶっつけ本番でした（笑）」

しかし、転向後1年を待たずに初めてのW-CUP戦で15位。アルペンで培ったスピードと高い滑走技術は世界トップを狙うに不足ないどころか、須貝は持ち前の爆発力で、瞬間に世界でマークされる存在となった。

スキークロスの魅力

須貝龍にとってスキークロスの魅力とはなんだろう。「勝てない選手に勝てること。単走では体が大きいほうが圧倒的に速いけれど、スキークロスはそれを戦略やデータ分析で補える。駆け引きです。いま世界で表彰台に上る選手は身長190cm・100kg超えが普通。僕は177cm、ないものを補うた

意・クセ・レース結果やコースデータとも合わせて数値化する。確率的に見ることで客観視し、冷静な対処や戦術につなげるのだ。「分析から導いた戦略に必要な体力やテクニックをつけて、雪上で試して正解かを確かめる。そのトライ＆エラーをずっと繰り返してきました」

須貝の成長と強さの背景には、こんな工夫があったのだ。

@ryoriross



長男の隼（れん）くん。2児のパパとしての優しさがあふれる

もちろんそれだけではない。「純粋にすごく楽しいスポーツなんですよ。ジャンプありクラッシュありのエキサイティングなヒートは、アトラクションみたいな感覚なんですよね。それに、この瞬間に自分が一番番とか、遅れてるのがわかるのが面白い。アドレナリンが沸きますね」

須貝龍という人間

「自分が楽しいと思ったことや、自分がやると決めたことを反復するのはすごく得意なんです。自分なりに分析して仮説を立ててトライしているので、何回も反復しないと検証ができないから。他人に言われたことは、自分の頭でしっかり考えてやってきたことや実証したことは重みが違う。そういう意味で、僕、あんまり人の意見を聞かないんだと思います（笑）」

須貝の所属するチームクラブを立ち上げ、アルペン時代から須貝をサポートしてきたクラブ代表の岸野大輔さんはこんなふうに語った。「須貝選手がすごいのは、常に客観的に自己を分析的に、必要なことに向かって工夫し、自ら行動する点。自己のマネジメン

トを徹底して確実に課題を達成するだけでなく、高いレベルで設定目標を超えること。そして、とても家族や仲間想いで人間性が高く、アスリートとしてだけでなく、人としてカッコいい。自然とみんなが応援したくなるんです」

SNSアカウントをフォローして選手を応援しよう



RYORIROSS

最高に速くてカッコいいスキーマーでいたい。

それがずっと原動力だった。いまも変わっていない。

原動力

ここまで須貝龍を強くしてきたものはないか。「高校生のとき、大学にいった先輩たちを見ていたら、自己管理をしなきゃいけない世界に入るタイミングで、それに失敗してスキーが遅くなった選手がたくさんいた。それがカッコよく見えなかった。僕はこれからも自分の思うカッコいい位置にいたいと思ってヨーロッパに行くことを選択してやってきた。カッコよく速く滑れる選手でありたいというのは高校生のときに抱いた純粋な思いで、それがずっと原動力になっています。

怪我もあったし、トレーニングが思うように進まない時

期も長かったけど、今年の世界選手権では自分を信じて滑りきることができた。高校生のときに思った理想の自分にはまだ完全には到達できていないかもしれないけど、そのライン上にはいられてるんじゃないかなと思っています。

もちろんミラノで金をとりたいし、W-CUPの総合優勝もしたい。優勝を重ねていく選手にもなりたい。目標はたくさんあります。手に入るかわからないものに挑戦するのは楽しい。

僕、実は『努力する』という言葉はあまり好きじゃないんです。『情熱は努力に勝る』と思っているから。心からこれをやりたい・好きだって気持ち持ちは、努力だと思ってするより強いな、と。情熱があれば

ば夢中になったり、大変なことも工夫して楽しいことに変えられる。息子たちにもそういうことのできる強い子になってほしい」

愛息の話になるとパパの優しい笑顔がこぼれる。「子どもたちにはいつも癒されてパワーもらっています」と嬉しそうだ。大切な家族のためにも、応援してくれるたくさんの人々のためにも、須貝龍は、決戦の冬へと挑む。



2025世界選手権@St.Moritz(SUI)で日本スキークロス史上初となる銅メダルを獲得。この日は「世界ダウン症の日」でもあった

須貝龍が
おすすめする

スキーの体をつくる トレーニング

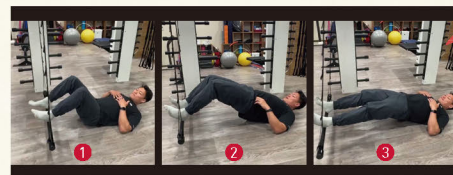
理想の滑りに近づくには、滑走技術を磨くだけでなくそれを支える「体づくり」も不可欠だ。
滑りのキレもスピードも、実はそこから生まれているとしたら…。
須貝選手に効果的なトレーニングレシピを教えてもらおう！

#1

加速筋を鍛える！

より速くなる！

もっと滑走スピードを上げるために、臀部やハムストリングの筋肉を強化しよう。
加速筋（加速に関わる筋肉）を鍛えることで、ポジションが高くなり、より速く滑れるようになるんだ。



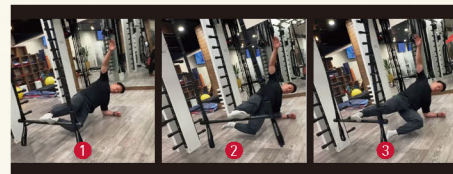
- How to 1
- ① 仰向けに寝そべて、足をバーに乗せる。
 - ② 腰を上げて体が肩から膝まで一直線になるようなブリッジ姿勢を作る。このとき、お尻と体幹をしっかりと緊張させることが重要。一番高い位置で1〜2秒静止。
 - ③ 足を前へ押し出す。この動作により、臀部〜ハムストリングに強い負荷がかかる。同時に体幹の安定性が求められるため、スキーの加速に近い動作が再現されている。

#2

内転筋を鍛える！

キレのある
ターンに

内転筋（太ももの内側の筋肉）を鍛えることでスタンスが広がりにくくなり、
体重やパワーが無駄なく直接スキーに伝わるため、キレのあるターンができるようになるよ！



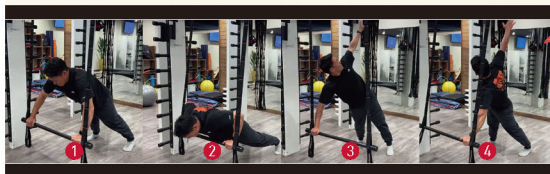
- How to 2
- ① 横向きに寝そべり、上側の足を動くバーに乗せる。下側の足は浮かせた状態に。
 - ② 腰を持ち上げて、体幹を使って横向きのブリッジ姿勢をつくる。肩・腰・バーに乗せた足が一直線になるようキープ。
 - ③ 腰を上げた状態を保ったまま、床から離れている下側の足を空中で前後にスイングする。体幹と股関節周りの安定性が求められる動き。一定時間スイングを繰り返す、反対側の足でも同様に行い、繰り返す。

#3

体幹を鍛える！

バランスが
崩れなくなる

この動きは、バランス保持力・体幹の安定性を高めるのに効果的。
悪雪やどんな斜面でもバランスを崩さない体幹をつくらう！



- How to 3
- ① バーに両手をかけて体重を支える。腕立て伏せのイメージ。
 - ② 体幹をしっかりと緊張させ、頭からかかとまでが一直線になるようにキープした状態で肘を曲げながら体を下げる。
 - ③ 肩甲骨を寄せるように腕を後ろに大きく開いて伸ばす。顔も腕と一緒に上に向ける。
 - ④ 反対側の腕も同様に行い、繰り返す。

※Eight Fit STUDIOの「QUEENAX」を利用。
アクション動画はコチラでCheck!



Eight Fit STUDIO エイトフィットスタジオ

アスリートからローカルまで御用達。
ビジターで1DAYでも利用できる！

クラブスポーツの2階に併設されている会員制の
ストレッチ&フィットネスジム「Eight Fit STUDIO」は
「からだメンテナンスラボ」として人気のスポット★



スタイリッシュな空間で楽しみながら

「Eight Fit STUDIO」の雰囲気は明るくナチュラル。木目調のインテリアの各所に観葉植物が置かれ、照明はLEDで、なんともリラックスできる空間だ。

フロアにはさまざまなトレーニング機器が並ぶ。定番のウェイトマシンからストレッチマシン、エアロバイクの他、ロープやバーを使って体全体を動かし、体幹やバランス力を鍛えたり、筋力アップや関節の可動域を広げ

られる機器「QUEENAX(クイナックス)」はユニークな設備で、クラブならではの。ヨガなどのワークショップも盛んに開催されている。

トレーニングメニューを個人にあわせて作成してくれる有料オプションもあり、フレンドリーなスタッフによるサポートも万全。1階に降りればショップフロアで美味しい珈琲も飲める。

このように、Eight Fit STUDIO

にはハード・ソフトの両面から、楽しみながら体づくり&メンテナンスができるように工夫が凝らされているのだ。

チームクラブのアスリートも御用達だ。会員制のスタジオだが、3ヶ月の短期間や半年間プランもあり、ビジターでも利用できる。シューズもレンタルできるので、湯沢エリアに滑りに行った際に、1日単位で気軽に利用することもできるのだ。ぜひ訪れてみては！

料金表

		年間プラン (12ヶ月)	半年プラン (6ヶ月)	短期プラン (3ヶ月)	ビジター 利用
クラブメンバーシップカード をお持ちの方	一般	¥3,500 ×12ヶ月	¥4,500 ×6ヶ月	¥5,500 ×3ヶ月	¥800 ／1B
	学生会員 (中・高校生)	¥2,800 ×12ヶ月	¥3,800 ×6ヶ月	¥4,800 ×3ヶ月	¥700 ／1B
	ビジター利用 クラブメンバーシップカード をお持ちでない方	—	—	—	¥1,000 ／1B

※エイトフィット会員登録費¥5,500(カード発行料・マシン使用説明含む)

INFO Eight Fit STUDIO

Open >>> 10:00~19:00(冬季無休)
住所 >>> 〒949-6102 新潟県南魚沼郡湯沢町
大字神立39-8 クラブスポーツ2F
TEL >>> 025-788-1788
※ビジター利用の場合、クラブスポーツ休日は利用
できません。営業日や時間は各SNSをご確認ください
Instagram >>> @xraeb_sport FB >>> @xraeb_sport





恩は返すと決めたから

幼い頃から
世界を夢見てきた
若月隼太。
「たどり着いた先に
何が見えるか、
どんな自分に会えるか」
数々の壁を越え、
挑戦し続ける彼が、
勝利の先に
見据えているものとは。

ATHLETE
FILE
ALPINE

覚悟と炊飯器をもってイタリアへ

苗場の雪山で生まれ育った若月にとって、世界を目指すことは特別なことではなかった。父は全日本選手権の優勝者、家にはオリンピックが遊びに来るような環境で、自然と世界を意識するようになった。トリノ五輪で4位となった皆川賢太郎選手の、「まだ日本人は誰もチャンピオンになったことがない」という熱のこもった言葉で、彼の心に火がついた。恵まれた環境を存分に活かし、一気に国内のトップに上り詰めるなかで、「このままでも勝てるはずだ」と、どこかで信じていた。

しかし、現実とは甘くなかった。初出場のW杯の結果が振るわず、ナショナルチームから除外——それは、想像してきた“世界”と、実際に肌で感じる現実世界の違いを痛感させる出来事だった。周囲の人々が離れ、一人になったとき、初めて周りの存在を意

識し、感謝と謙虚さを知る。ただ前だけを見て突き進むのではなく、周囲を冷静に見る客観性も得ていった。そこから若月は、自分の土台を一から作り直していく。日本でのベース作り、スポンサー探し——鋭い視線は自然と、自分自身に向けられるようになった。「自分をどう見せるか」「誰と戦っていくか」。起業家のような視点で芽生え、地元を盛り上げる企業と契約を結ぶようになる。経営者とは本音で語り合い、アドバイスをもらう。そして報告の際には、単に競技の結果を伝えるだけでなく、遠征先で得た現地のビジネス情報やトレンドも共有するようにしている。「勝つためには稼ぐ力も必要」という考えから、会社の経営とアスリートのセルフマネジメントには多くの共通点があると実感している。だからこそ、ただ



イタリアでの所属チームWRAC (World Racing Academy)

の“選手とスポンサー”という関係を越え、互いに学び合うビジネスパートナーのような関係を築いていきたいと語る。

とにかく環境を変えようと、単身イタリアへと渡った。そこは会話を大切にする文化。選手のほうから聞くまではとくに指示をしないというコーチングスタイルは、選手の主体性を大きく育んだ。世界中から集まるチームメイトたちからも多くを学んだ。技術やマテリアルは同じ

日本の頂点を経て原点に立ち返り、そして再び世界の頂点へ

でも、試合で結果を出すベテラン選手に、「ここから先は、マインドゲームだ」と気づかされた。焦る若月に、コーチはいつも“patience”という言葉をかけてたが、日本での“我慢は美德”という価値観とは違った。同じことの繰り返しに耐える我慢ではなく、環境を変え、新しいことを学び、質にこだわる。やるべきことをやり切ったうえで、最後に時が来るのを信じて待つ——それこそが本当の忍耐だと、コーチの言葉を通じて知った。静かに重ねた努力は、あるときふいに実を結んだ。日本人最高位、ヨーロッパカップ5位という成績。閉ざされていた扉が開かれる瞬間だった。だが試練は続く。W杯復帰戦で、前十字靭帯断裂と半月板損傷という大けがを負ったのだ。

そんなとき、支えになったのは妻の存在だった。彼が無理をしすぎないように寄り添い、休むことの大切さを教えてくれた。同じアルペンスキーの経験者で、よく理解者だが、普段はあえてスキーの話はしないという。「はじめは妻に寂しい思いをさせないようにかけていた電話も、気づけば自分が励まされる時間になっていた」。急に世界選手権への出場が決まった際にも、自分でチケットを手配し、忙しい仕事の合間を縫って駆けつけてくれた。栄養に気を配った手料理も、彼の支えとなっている。



遠征中のメニューはお鍋とカレーが多いという。ヨーロッパは鮭も美味しいそう

世界を目指すアスリートの“オン”は、常人にとっての非常事態のようなものかもしれないが、それを“オフ”にできるのは、そんなパートナーの存在と、好きなお風呂や料理といった無心になれる時間だという。海外遠征にも欠かせない元気の素は、お米、そしてイギリスのバンド・オアシスの音楽だ。地元・苗場開催のフジロックは、彼にとって最高の“遊び”であり、観客と



若月選手はフジロックと同年

一体になったアーティストたちの姿に、「いつか自分も、世界の舞台でそんな感覚を味わいたい」と胸を躍らせる。自然と心に浮かぶのは、バンドのデビューアルバムのオープニングトラック「Rock 'N' Roll Star」。宣戦布告のような力強い歌詞には、「自分が決めた道をどこまでも行く」という彼の意志が感じられる。

見たいのは、熱狂するオーディエンス。見たくないのは、応援してくれる人たちの悲しむ顔。「応援してくれた人たちに、恩返しをしたい」——そう語る彼の眼差しには、強さの根底にある優しさにじむ。幼い頃から夢見た世界、憧れた先輩たちのように、今度は自分が子もた



@hayata_wakatsuki_waky

昨年8月に入籍し、プライベートでも新たな一歩を踏み出した

ちの憧れになりたい。そして、クレブのように地元を盛り上げる企業と手を取り合い、スキー業界にとどまらず、日本全体を元気にする存在になりたいと願っている。悔しさから見返したいと思った時期もあったが、いま若月が進むのは、感謝と恩返しのだ。研ぎ澄まされたマインドと、真の忍耐を武器に、これからも新しい自分を探し続けていく。

PROFILE



10代からナショナルチームに選出され、国内外で活動する。2020年には地元苗場でW杯初出場。欧州を拠点にW杯を転戦する。

チームクレブ・テクニカルアドバイザー
国民体育大会3連覇
ワールドカップ通算15戦出場
ヨーロッパカップ5位(日本人史上最高位)
2025世界選手権出場

SNSアカウントを
フォローして
選手を応援しよう



HAYATA_WAKATSUKI_WAKY

チューンナップ哲学

若月選手

ワールドカップレベルの選手と聞くと、専属のサービスマンが何人もの回を回す姿を思い浮かべるかもしれないが、若月選手はチューンナップをすべて自分の手で行っている。身体感覚をダイレクトに、そしてスピーディーに反映させたいという、彼なりの「セルフサービス」なのだ。手塩にかけた「愛車」は常に3~4台。レースごとにコースレイアウトや当日の雪質を踏まえ、何度もテストを重ねる。気温や湿度によっても調整の手順やタイミングを変える様子は、まるで演奏前にギターを調整するミュージシャンのようだ。滑る国も、山も、天気も——すべてが変わり続ける世界だからこそ、彼は一切の準備を怠らない。

point
02 仕上がりは「爪」で確認

板はセンター、トップ、テールの3つに分け、センター部分はターン中にしっかり、しかも「かなり」グリップするように仕上げる。一方、トップとテールはあえて遊びを持たせる。他の選手と比べても、この調整を極端に行っているという。また、エッジの仕上がりは指の腹ではなく、寒さで感覚が鈍らない爪で確かめるそうだ。

世界トップレーサーの
チューンナップを覗いてみた

カニは優れた適応力、回復力、協調性を持つ生き物だ。未知の環境に挑み、怪我を乗り越え、チームと共に戦う若月選手の姿には、そのたくましが重なる。鍛え抜かれた肉体は甲羅のように強く、氷を切るスキーのエッジは鋭い爪のようだ。彼は、自分の武器である道具とどう向き合っているのか。

point
04 Jupiterも活用

遠征中は「Jupiter」の設置店舗を探し、難しいベースエッジの角度調整を、シーズン序盤と中盤にメンテナンスとして行っている。ベースエッジには、ジュピター独自の「Vエッジ」加工を施しており、GS用の板には基本設定として「トップ0.7°/センター0.5°/テール0.7°」の角度を採用し、アイスパーンで戦える板を仕上げている。まだ機械では行えない、スクレーパーでワックスをはがす作業を含め、すべてが自動化されれば、これまで作業に費やしてきた多大な時間を、(いつも2時間はかかるという)セルフケアや滑りの分析に使えと、大きな期待を寄せている。

point
06 終わりなき探究心

ハイシーズンは乾いたドライな雪、その後は気温が高くざらついた雪。そうした大きな切り替わりがある中、常に状況を想定し、板を仕上げていく。技術も道具も、自分で試し、改善し続ける。若月選手にとって、チューンナップとは単なる準備ではない。己の技術と可能性を極限まで引き出すための、終わりなき探究なのだ。

point
01 エッジが8割

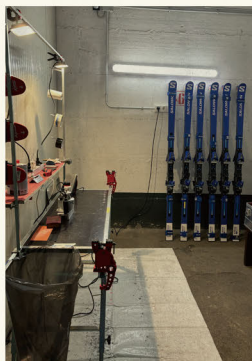
このレベルになると、どのワックスが滑るかという話ではないという。氷の絶壁は何をしても滑る。むしろ、どう落ちていくか。エッジの立て方ではなく、どこまで角を落とすか。実際、作業時間の約8割はエッジに費やされるとい、トップ選手たちはエッジの使い方だけでなく、エッジの作り方までも熟知している。もちろん、天気予報も最低2つ以上は欠かさずチェック。最も合わせるのが難しいのは、実は「グリップしすぎる簡単な雪」だと、彼は笑う。

point
03 貪欲な学び

チューンナップの方法は、サービスマンやチームメイトから貪欲に学んできた。道具も進化していくため、「これ」というこだわりを持たず、良いと思ったものはどんどん試す。お気に入りにはドイツ製のSnoliのファイルとダイヤモンド、ワックスはSwixを愛用している。

point
05 無心になれる時間

単調で疲れるワックスを塗ってはがす作業も、嫌いではないという。むしろ、無心になれるひとときであり、掃除や料理、お風呂と同じように、心を落ち着ける役割を果たしているそうだ。



Jupiter-X ジュピター-X

まだ試していない? 世界王者と同じ仕上がりを体感できる
最先端チューンナップマシン



ジュピターシリーズ中の最上位モデル、フルスペックの「ジュピター-X」は、世界に数台のみ存在し、日本のクラブスポーツ内ゼブラチューンナップファクトリーに設置されている。

日本唯一のマシンで、世界に一台のカスタムチューンを

オーストリア・ウィンターシュタイガー社が開発した全自動チューンナップマシン「ジュピター-X」。ボーダーカット、エッジ調整、滑走面研磨、ストラクチャー加工、ワクシングまで一貫して仕上げる。

アルペンスキー界の王者マルセル・ヒルシャーのブランド「ヴァンディア」のスキーはすべてこのマシンで仕上げられ、契約選手ヘンリック・クリストファーセンも愛用。世界のレーシングチームが注目する背景には「Vエッジ」という革新技術がある。トップ、センター、テールの各部分でエッジ角を自在に変え、0.1°単位で微調整が可能。この技術がスキーの特性をさらに活かす。

板の性能だけでなく、ユーザ

ーのニーズを引き出し、それぞれの希望に沿った設定を行うのは人の仕事。それを担うのは、メインオペレーターの長谷川絵美さん。彼女は湯沢出身の元アルペンスキー日本代表で、ワールドカップには通算88戦出場し、長年日本のアルペンスキー界を牽引してきた。2018年の引退後、セカンドキャリアとして選んだクラブでは、雪や板の状態に合わせてチューンナップに、世界を転戦したレーサーとしての知見が活かしている。

1911年、レルヒ大佐が日本に初めてスキーを持ち込んだのも、2022年にジュピター-Xが世界初稼働したのも新潟。周囲に30以上のスノーリゾートが集まる湯沢の地で、ユーザーの熱意に応え続けるクラブがこのマシンを

稼働させていることは、日本のスキー業界が再び勢いを取り戻すきっかけになると感じずにはいられない。将来、「人気スノーリゾートにジュピター-Xあり」という時代が来るかもしれない。完全自動制御による“完璧”は、もはや理想ではなく現実だ。完璧なスキーが仕上がったとき、今度は人間がそれに追いつけるかが問われる。通過するだけで頭からつま先まで完璧な体が仕上がるマシン——そんな未来を、つい夢見てしまう。

料金例

- SKI スタンダード
>>> 10,000円
- SNOWBOARD スタンダード
>>> 10,000円
- コンペティション Vエッジ
>>> 18,800円

未来の
チューンナップを
音と映像とともに
チェック!



クラブスポーツのアンバサダーとして、コーチング活動なども行う長谷川さん



世界に挑む19歳の軌跡

感謝を力に変えて

no.03
ATHLETE
FILE
Mogul

田口友麻

YUMA TAGUCHI

PROFILE

東京都あきる野市出身。3歳からスキーを始め、小学生の頃から本格的に競技生活をスタート。2023年全国選手権で優勝を飾り、ナショナルチーム入り。2005年10月25日生、早稲田大学スキー部所属。



SNSアカウントを
フォローして
選手を応援しよう



YUMA_M0000



今年チームクレーブに
新加入したモーグル・田口友麻。

一見、どこにでもいる
女子大生だが、雪上では一変。

小柄な体からは
想像できないスピードと
ダイナミックなエアで
観る者を魅了する。

そんな彼女が歩んできた
葛藤と成長の道、そして
支えてくれる人々への思いとは？

スキーが日常にあった少女、
競技への扉を開く

東京生まれ東京育ちの田口友麻にとって、スキーは幼い頃から日常の一部だった。NASPAやかぐらなど湯沢のゲレンデに、スキー好きの両親に連れられて毎週末通っていたある時から、モーグルに没頭するようになる。現地で知り合った人にチームを紹介されたのだ。



スキーを始めた頃。毎週末東京から通うのは大変だったが、それが当たり前の生活だった

「それまでは純粋にスキーが好きで滑っていただけでした。両親も競技志向ではなかったです。でも“同世代にこんな子ができる！”と刺激を受けました」

いまではナショナルチームの一員として世界の舞台に立つが、当初は思うように結果が出ない時期が長く続いた。「まわりの同世代の子たちに比べて、上位の大会に出るのが遅く、自分だけ取り残されているような感覚でした。当時は辛かったです」

それでも田口は歩みを止めず、悔しさを糧に少しずつ成果を重ね、自信と実力をつけていった。

涙の最終戦、
支えてくれたのは家族だった

2024-25シーズン、田口はW杯やユニバーシアード、世界ジュニア、全日本と多忙なシーズンを過ごした。なかでも印象に残っているのがW杯北米戦。カナダのヴァル・サン・コーム戦で自身初の決勝進出、9位入賞を果たす。「うれしかった反面、“たまたまだったんじゃないか”って不安もありました」

好調の一方で、終盤にはクラッシュや不本意な結果も。W杯最終戦ではプレッシャーから本来の力を出せず、悔し涙を流した。「最終戦の結果で来シーズンのW杯出場権が決まると発表され、体が固まってしまいました。レース後に両親に電話した時はずっと泣いてしまいました」

そんな彼女を支えるのが家族。幼い頃から一緒に滑っていた両親、そして同じくモーグルに打ち込む弟。時には厳しい意見もあるが、常に励ましてくれる。

『『滑りのここが良くなかった』とズバズバ言われることもあります。けれども『明日はベストランできるように頑張ろう』って言ってくれるのが本当に心強いです』

夢は五輪の表彰台。

感謝を胸に、前へ

田口の武器はスピードとエア。器械体操の経験から、空中での姿勢やバランスには自信がある。デュアルモーグル

では高難度の技を武器にアドバンテージを得る一方で、コブでのターンにはまだ課題を感じている。

「モーグル選手ですが、実はコブが苦手です(笑)。ターンだけなら国内でも中の上くらい。もっと磨いていきたいです」

現在は早稲田大学で学業と競技の両立にも挑んでいる。日々忙しい日常を送りながらも、田口が見据えるのは明確な夢だ。

「オリンピックに出て、表彰台に立ちたい。幼い頃からずっとそう言い続けてきました。とくに、幼少期と一緒に滑っていた原大智選手が平昌五輪でメダルを獲ったことや、昨シーズン出場したユニバーシアードでの経験が大きな転機になりました。JAPANのユニフォームを着て、特別な舞台で戦うあの感覚を味わいたい。そのためには、大学生のうちに一度その大舞台を経験し、次の五輪で夢を叶えたいと思っています」

支えてくれる人への感謝を胸に、田口友麻はこれからも着実に前へと歩み続ける。



見た目はふわっとしているが、芯のある真面目な性格だ

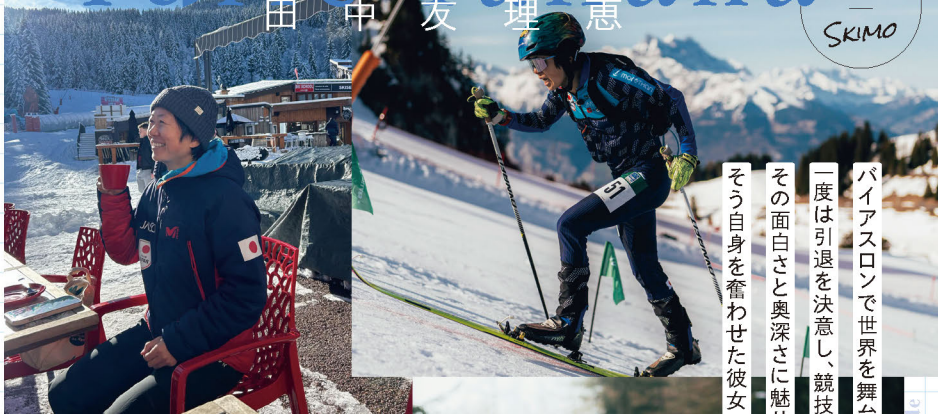
Climb

Gear transition

Yurie Tanaka

田中友理恵

no.04

ATHLETE
FILE
SKI MO

「一度は引退を決意し、競技の第一線から離れようとしていた時に出会った「スキーマ」。

その面白さと奥深さに魅せられ「もう一度あの舞台に立ちたい」。

そう自身を奮わせた彼女の情熱はどこから来るのだろうか？

バイアスロンで世界を舞台に活躍した田中友理恵。

High altitude

Backcountry



原動力は「チャレンジし続ける」

スキーマでもう一度世界を目指す



Uphill

Skin track

スキーマとの出会い、
そして転向の決意

私は幼い頃から大学生まではクロスカントリースキーに打ち込み、その後バイアスロンの選手として冬季五輪に2度出場しました。バイアスロンは11年間やりきったので、本当に心残りがなく引退を決意しました。その時スキーマ（スキーマウンテンアリング）が2026年のミラノ・コルティナダンペッツォ五輪で正式種目になると知りました。もともとそういう競技があることは知っていましたが、オリンピックの正式種目になることが気になって、軽い気持ちでレンタル装備で体験しました。その1週間後の白馬の大会にも出場、結果は2位。これなら、しっかり練習すれば可能性はあると感じて、スキーマへの転向を決めました。

競技引退を発表したわずか1ヶ月後に撤回したので、周囲は驚いていました。けれども母は「やっぱりやと思った」と言ってくれて（笑）。事前に相談もしていなかったので私も母から言われて逆にびっくりしました。けれども、その言葉に背中を押された気がしました。

海外遠征と
日々のトレーニング

スキーマは登りだけでなく、滑走、トランジット（シールの着脱やスキーの履き替え）、スピードなど、幅広い能力が求められる競技です。夏は山を走ったり、ロードバイクに

乗ったり。世界各地で雪のコンディションが異なるだけでなく、ヨーロッパでは標高2000mを超える場所でのレースもあり、どんな環境にも対応できる力が必要です。そのために戦える体づくりを年中徹底しています。また、標高が高いところからは山々の景色も素晴らしく、眺めも楽しめるのがスキーマの魅力のひとつです。練習の合間やレース前に見ると癒しになりますね。

オリンピック種目になったことで世界のレベルは急上昇。元アルペン選手も参入し、滑走技術や筋力で差を感じる場面も多いです。ただ、日本勢はトランジットのような技術面で強みがあります。私も苦手なブーツ登行を補うため、それ以外でリードを保てるように意識したレース展開を行っています。

支えに感謝し、
未来へ挑む

日本ではスキーマの練習環境が限られています。スキー場での登行は禁止している場所が多く、できる場所でもリフト営業前の朝早く限られた時間に練習するしかありません。結果的に、海外を拠点に活動することが多いです。それでも、所属するアスクゲートやクラブスポーツ、クラウドファンディングなど、多くの方々に支えられて活動を続けられています。夏は所属企業のイベント企画や広報の仕事もしていますが、冬は競技に専念できる環境に感謝して

います。

オリンピックはやはり特別な舞台。2大会経験しても、もう一度あの場所に立ちたい。幼い頃に観戦した長野五輪の記憶が、いまも自分の原点になっています。スキーマはまだ日本では知名度が高くありませんが、世界で戦う姿を通じて、もっと魅力を広めたいと思っています。

2026年の五輪出場を目指して日々トレーニングを続けています。まだはっきりと決めていませんが、競技を終えた後も地元で恩返しをしながらスキーマに関わり続けたい。次の世代に、自分の経験を伝えていけたら嬉しいですね。

tanaka_yurie16



「スキーマをすると自然と笑顔になります」と語る田中友理恵

PROFILE

新潟県南魚沼市出身。幼少時からクロスカントリースキーを始め、大学卒業後バイアスロンに転向。冬季五輪2大会出場を果たす。2022年スキーマに転向し、世界を舞台に戦い続ける。1989年1月6日生。最近のマイブームはレコード、ラーメン、クラフトビール。



SNSアカウントを
フォローして
選手を応援しよう

>>>



TANAKA_YURIE16

ミッションのために

40m先の氷上に描かれた円を標的にストーンを滑らせていく。ミリ単位のコントロール精度やわずかな判断が勝負の明暗を分け、極めて高度な技術と戦略性が求められるカーリング。この競技がいまから8年前、日本で一躍脚光を浴びたとき、氷上で熱く戦っていたのが山口剛史選手だ。日本の名門SC軽井沢クラブの司令塔であり、長く日本のカーリングを牽引してきたトップカーラー。

「2018年の平昌は日本男子チームにとって2度目の出場を果たせたオリンピックでした。世界選手権の結果でわずか10ヵ国しか出られない狭き門。結果は8位でしたが、僕はあまりにも楽しくて、ZONEに入っちゃって記憶が

ほとんどないんですよ(笑)。やっぱりオリンピックは違う。カーリングをもっとメジャーなスポーツにするというミッションのためにも、ミラノを目指してトレーニングに励んでいます。

今回、SC軽井沢クラブは男子・女子・ミックスダブルスの3カテゴリーでチャンスがあります。男子は、まずは9月の国内代表決定戦で優勝することが必須。その次は12月のオリンピック最終予選で、残り2つの出場枠をかけての熾烈な戦いになります」

「氷上のチェス」ともいわれるカーリング。

戦略やチームワークが勝敗を分ける氷上の熱い頭脳戦は、見るほどに知るほどに惹き込まれていく。クレブスポーツがサポートする日本を代表する名門チーム「SC軽井沢クラブ」が、いよいよ大勝負に挑む。

メンバーが投げ、掃き、描かれる軌道に戦略と信頼が込められる。

no.05
ATHLETE
FILE
CUTZLING



僕らの強み

男子チームは直近では2022、2023、2025年の日本選手権を3回優勝、2025年の世界男子カーリング選手権に日本代表として出場。その実力からすれば期待は膨らむ。4人のメンバーは年齢も経歴もバラエティ豊かな個性派ぞろいだ。

「僕らの強みはとくにゲーム後半の粘り強さ。氷は場所によって、日によって全然違う。さらに時間による変化を読むのが難しいんです。氷の状態によってストーンの曲がり方や滑り方が刻一刻と変化します。スウィープ（こすり）によってもストーンを2~4m動かすことができます。それらを全部読みながら、いかに作戦通りにゲームを運ぶか。

後半になって氷の状態がよく見えてくれば戦術的にも攻めやすい。でも1試合が2~3時間と長丁場なので、すごく集中力や忍耐力が必要だし、氷の上って寒いですから(笑)。

最初に投げる「リード」は同じようなショットを淡々と繰り返せること。「セカンド・サード」は、いろんなショットが要求されるオールラウンダー。最後の「スキップ」は司令塔として戦略的・冷静でプレッシャーにも強くなくては、といわれています。

その上で、最も大切なのはコミュニケーション。4人の力がそろったときが一番強い。勝つための筋道はおおよそ僕が考えるのですが、最後の10エンドの勝負の1投まで

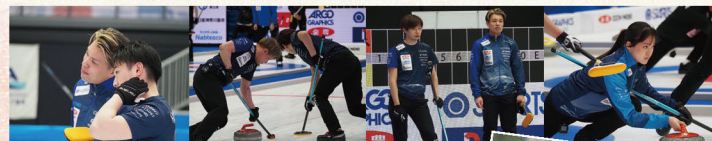
Instagram: sckaruizawaclub

CUTZLING — SC KARUIZAWA CLUB

Instagram: sckaruizawa.women



1.男子チーム：左から柳澤李空・山口剛史・山本遼・小泉聡 選手
2.女子チーム：左から上野美優・上野結生・西室淳子・金井亜翠香 選手



一投で展開が変わり、最後まで勝敗がわからない。最後の一瞬まで熱い駆け引きを見逃すな！

山口剛史 / Tsuyoshi Yamaguchi

北海道南富良野町出身。力強いスウィープを武器とし、サードやスキップをこなす。世界選手権6度出場、日本選手権では7度の優勝を誇り、2018平昌五輪では8位入賞。SC軽井沢クラブではクラブ運営やジュニアの育成にも取り組む、かなめとしてなくてはならない存在。

SNSアカウントをフォローして選手を応援しよう



SC KARUIZAWA CLUB



SC KARUIZAWA WOMEN



に個々の力をどう引き出すか、それが肝です」

その魅力を見てほしい

ストーンが滑るその数秒に緊張と歓声、静と動が交錯する様は、観る者を惹きつける。山口選手はカーリングの魅力をこう語る。「40m先の的に向かって投げるストーンが思い通りに“びたっ”と決まる快感が楽しい。そして相手との駆け引き。投げる精度だけでなく作戦で勝負が変わる面白さは特別です。

カーリングは観るスポーツ

でもあります。作戦の内容まではわからなくても、それすらも予想しながら自分がチームの指揮をとる監督になった気分で見ると、最後に答え合わせがすごく楽しいです。4人の持ち味が作戦にどう発揮されているのか、ぜひゲームを観てほしいです。僕ら試合中はマイクをつけていますから、実際のコミュニケーションも聴いてもらおうと、さらに面白いと思います！」

9月の国内代表決定戦は、NHK BSもしくは日本カーリング協会のYouTube LIVEで観戦が可能だ。ぜひSC軽井沢クラブを応援しよう！

競技の基礎知識をおさらい

illustration/ikeuchi litie



Skicross

スキークロス

4人の選手が同時にジャンプ台やカーブのあるコースを滑走し、速さを競いあうスリルあるレース競技

競技説明

約1000mのコースにジャンプ台、カーブ、起伏が配置されている。予選は1人ずつ滑走しタイムを計測。決勝ラウンドでは4人同時にスタートする。決勝ラウンドはトーナメント形式。各組上位2名が進出。最終的に4名でメダルを争う。選手同士の接触は認められるが、故意の妨害は失格となる。

みどころ

複数人が同時に滑るため、抜きつ抜かれつの激しいバトルが繰り広げられる。選手同士の接触や転倒も起こりやすく、その度に順位が大きく入れ替わるドラマチックな展開がみどころ。とくに、ジャンプの着地後やバンクの出口での位置取り争いは、まさに肉弾戦。ゴールを切るまで予想外の展開が起こるため、順位が最後までわからない面白さがある。勝敗もその場で分かって観戦しやすい。



Alpine Skiing

アルペンスキー

設置された旗門を通過しながら最短タイムを競うスキーの花形種目

競技説明

アルペンスキーにはダウンヒルやスーパーGといった「高速系」と、ジャイアントスラロームやスラロームの「技術系」という2種類がある。コース上の全旗門を通過し、最速のタイムを目指す。選手は一人ずつ滑り、電子計測システムで1/100秒まで正確に計測する。旗門の不通過は失格。ここでは若月選手が主戦場とする技術系に焦点を絞って紹介する。

ルールとみどころ

- SL(回転)コースの標高差は180~220m。アルペンスキーのなかで最も旗門数が多く、旗門の間隔が狭い。短いコースで細かなターンが連続するため、高い技術力と集中力、そして瞬発力が要求される。
- GS(大回転)コースの標高差は250~450m。回転(スラローム)よりも旗門の間隔が広く、スピードが出やすい種目。高速域での正確なターン技術が重要になる。



モーグル

深く急なコブ斜面を滑り降りながら、途中に2つあるジャンプ台でエアを入れてゴールを目指す。滑走技術、スピード、エアの3つの要素を競う

競技説明

コース全長は約235m。平均斜度28度の斜面に規則的に配置されたコブを滑りながら、途中にある2つのジャンプ台で規定の技を入れる。ターン、エア、スピードの3要素の合計点で競い合う。2人の選手が同時に滑り、勝敗を競うデュアルもある。

ルールとみどころ

得点はターン(60%)エア(20%)スピード(20%)の配分で100点満点。スムーズかつ正確に滑走しているかなどを評価するターン。2つのジャンプの完成度や難易度を見るエア。コースごとに設定された基準タイムと比較したポイント。ターンが勝敗を分けるポイントだ。



Skimo

スキーモ

「Ski Mountaineering」を略したスキーモ(SKIMO)は、スキーと登山を融合した山岳競技

競技説明

5つの種目があるSKIMO。雪山の自然地形が舞台の「インディビジュアル」、その短縮版「スプリント」、短距離を男女ペアで闘う「混合リレー」、登りのみの「パーティカル」、長距離・長時間で行う「チーム」。スキーや登山技術を駆使してコース走破を目指す。

ルールとみどころ

インディビジュアルの合計標高差は男子1300~1600m、女子は1150m~1400m。合計標高差が大きく、幾度も山を上り下りし、1時間半~2時間程度とレース時間も長い。雪上のトレイルランニングとも呼ばれる。スプリントは標高差70mほどの斜面を、スキーやブーツで登り、スキーで滑降する、スピード感ある種目。



Curling

カーリング

「氷上のチェス」とも呼ばれる、高度な戦略とテクニックが求められるスポーツ

競技説明

1チーム4人編成。各エンドで交互に計16個のストーンを投げ、ハウスと呼ばれる円の中心に最も近づけることを目指す。投球時にストーンに回転をかけカーブさせて投げた後に、2人がブラシで氷をこするスイーピングで速度や軌道を微調整する。司令塔役の指示がキモ。

ルールとみどころ

最初のエンドはコイントスで先攻後攻を決め、その後は得点したチームが次エンドの先攻だ。各エンド終了時にハウスに最も近いストーンを置いたチームが得点権を有し、その際、相手より中心に近い自チームのストーン数が得点となる。これを10エンド繰り返すため、1試合は約2時間30分と長丁場に及ぶ。



アルペンスキー界の伝説の王者
マルセル・ヒルシャー率いるVAN DEER-Red Bull Sportsが、
オーストリアのScheffau am Tennengebirgeに
新たな拠点「House of the Deers」の建設を進めている。
10月のOpenが待ち望まれる現地を訪ねた。

**VAN DEER-Red Bull Sportsの
すべてがここにある。
そしてスキーの未来も。**

House of the Deers

The greatest Kingdom

緑に包まれた新たな拠点

15年に渡り世界トップに君臨続けたマルセル・ヒルシャーが情熱をかけて自ら開発したスキー「VAN DEER-Red Bull Sports」。2022年のブランド設立から、使用選手が次々とW杯の表彰台に上がり、瞬間にシーンの主役へと躍り出た。

さらには'24-25シーズン、なんとヒルシャーが6年ぶりに現役復帰し、変らぬ滑りで世界を驚かせ、翌'25-26は初のブーツをリリース。クオリティの高い仕上がりにスキー業界は舌を巻いた。こんな破竹の勢いを象徴するかのように、この秋、ヒルシャーは母国、オーストリアに驚きの新拠点を立ち上げる。

「House of the Deers」は、スキー製造のすべてを集約した、ファクトリーを含む新施設

設だ。これからはすべての製造プロセスがここに統合される。広大な敷地に建てられる施設のすぐ近くには、美しい湖が広がり、湖畔で穏やかなひと時を過ごすこともできる。

VAN DEERのイメージカラーである深いグリーンを纏った建築は、周囲の美しい自然と調和したデザインが印象的だ。このVAN DEER-Red Bull Sportsの里を訪れる人々に、ヒルシャーは、最高のギアに出会うだけでなく、癒

しの時間をも提供したいという願いを込めているのだ。

すべてがここから始まる

「House of the Deers」は、ユーザーも利用できるプロショップとチューニングサービスを兼ね備えた空間となる。ここでは最新のギアだけでなくチューニングサービスも提供され、訪れる人々はプロと同じ品質のケアを受けることができる。



↑敷地面積は13,000㎡に及び、かつての砂利採掘場跡地が再開発された
→未来を感じさせる曲線美が際立つモダン建築



1 大人気のスキー 2 今季リリースのブーツは話題沸騰中 3 建設現場のVAN DEERのコスメが施された車はヒルシャーの愛車？ 4 重機までブランドカラーでロゴ入りだ！ 5 現場でのヒルシャーの笑顔からワクワク感が伝わる 6 なんとヒルシャー自ら重機を運転！

2025年10月グランドオープン！

最高のギアに出逢えるVAN DEERの未来基地

製造ラインやチューニング工程はガラス越しに見学が可能で、最高のギアがどのように生まれるのか、そのプロセスを間近で見ることができ。また、カスタムブーツフィッティングエリアも設置され、経験豊富なスタッフが常駐し、最適なブーツ選びと調整ができるという。

このような場を設けること

で、プロアスリートだけでなく一般ユーザーの声をダイレクトに開発に反映させ、常に進化を生み出す基地として機能していくのだ。建設は最終段階に入り、なんとヒルシャー自ら重機を運転して、現場で汗を流しているという。待ち望まれる完成は、シーズンの開幕に合わせた10月予定。

ヒルシャーの自宅とRed Bull

本社の中間地点に位置するこの場所は、彼のスキー人生の集大成であり、スキーの原点を支える場所でもある。Red Bullの支援のもと生まれる「House of the Deers」は、VAN DEER-Red Bull Sportsのブランドストーリーをさらに強固なものにしていくだろう。ヒルシャーが掲げる「スキーの未来」がここから始まる。



House of the Deers

The greatest Kingdom